

汚いとされ、したがってこの下着の洗濯は他のものとは別にしてより丁寧に洗濯する。

さらに家の中では、トイレは不浄であると考えられているので、トイレ専用のスリッパがあり、タオルもトイレ専用のものが用いられる。このような行動は、最近では外国人の影響を受けて大分変わってきた。(西洋の家ではバスルームの中にトイレが設置されている。)

以上述べたように、現代の衛生習慣と穢れとの思想との関係について、例をあげて述べたが、これ

らを要約すると、内・外＝上・下＝清潔・不潔＝浄・不浄の思想が存在することがわかる。

最後に「マヌ法典」の穢れと古代日本の清浄・不浄の思想とを比較すると、明白な類似を見出すことができる。すなわち、「マヌ法典」では、脂肪、血液、頭垢、大小便、鼻汁、耳垢、痰、涙、眼脂、汗を穢れとしたが、「古事記」においては、汚染されている物体および液体を見たり、触れたりすることが不浄であると考えたのである。

(平成21年9月例会)

森鷗外と原田直次郎

荒井 保男

鷗外、森林太郎は西欧芸術に造詣深く、ドイツ留学帰国後、美術批評を行い、美を論ずる場合、審美学を規範として行うべきことを提唱し、審美学を移入し、わが国の近代美術発展に貢献した功績は大きい。鷗外の芸術観の形成に、少なからぬ影響を及ぼした人物がいる。原田直次郎である。原田を知り、鷗外との交遊を知ることは、鷗外の芸術観を理解する上で、大きな意義があると思われる。

原田直次郎は鷗外の名作「うたかたの記」の主人公のモデルである。

原田が鷗外と知り合ったのはミュンヘンに於いてであった。鷗外がドレスデンからミュンヘンに赴いたのは明治19年3月8日のことである。鷗外の日記によれば、同年の4月25日に原田は鷗外の訪問を受けている。二人がどのようにして知り合ったかは明らかでない。岩佐新の紹介とも云われる。

原田は兄豊吉の紹介で明治17年2月渡独。兄豊吉の紹介でガブリエル・マックスの門下生となり、ミュンヘンアカデミーに入学し、そこに通学するとともに、マックスの個人教授を受けた。

この時代、すでにフランスでは印象派の時代であったが、ミュンヘンではビロティらが君臨して

おり、これに反抗して分離派の生ずるのは、明治20年代のことである。

鷗外は処女のような官能でドイツ絵画を真摯に学ぶ原田の姿勢に心惹かれていった。原田は芸術(美)そのものに没入して他を顧みない美の中に生命の尊さを感じ得る心の持主であった原田は夢みる人である。夢みる芸術家は自分の思想に忠実であろうとする。思想は技術によって表現されるものであるが、原田は技術を超越したところに価値を認めていたのである。

この原田の芸術論に鷗外の中に内在していた文学論が共鳴しあい、鷗外の芸術観に影響を及ぼしていったと思われる。原田との邂逅が鷗外をして美術批評家への道を可能にしたのである。

バイエルン国王ルードヴィヒ二世が明治19年6月13日、スタインベルヒ湖に溺死するのに遭い、のち原田らと同地を訪れ、それがやがて名作「うたかたの記」の誕生となる。

二人はあい前後して帰朝するが、明治23年春、第三回内国勸業博覧会に出品した原田の「騎馬観音」が外山正一(東大教授)によって批判されると、鷗外は憤然として原田擁護の筆を執った。「外山正一の画論を駁す」がそれである。原田はこの仏画により人間味のある観音像を意図し、仏画の

なかに西洋的ロマンティズムを描破しようとしたのである。

鷗外は外山の言をしりぞけ、審美的仮感と実感との相異を美学的に説き、美の理論的根拠をハルトマンの審美学によって証明しようとしたのであった。

以後、二人の交遊は深まっていったが、明治

32年12月26日、原田は病（肺結核）を得て、不婦の客となってしまふ。

鷗外はその悲報を左遷の地九州小倉で聞き慟哭し、原田のために一文を草し、やがて遺作展開催のために奔走する鷗外の美しい友情にも言及した。

（平成21年9月例会）

書籍紹介

宮入慶之助記念誌編纂委員会 編

『住血吸虫症と宮入慶之助——ミヤイリガイ発見から90年——』

住血吸虫のライフサイクルを発見した宮入慶之助（1865–1946）の記念館（<http://www5.ocn.ne.jp/~miyairi/>）の開館（1999年）及び2004年の桂田富士郎（1867–1946）による日本住血吸虫発見100周年などを契機として、日本の住血吸虫症研究者らは、宮入の業績およびその後の研究動向、予防活動などについて検証作業の必要性を認識するに至った。寄生虫病学者はもちろん、医学史研究者、新聞記者などが本書に貢献している。

この本は第一部と第二部という構成にわかれているが、むしろ、「医学史」¹⁾、「予防」²⁾、「住血吸虫症の学術」³⁾という三部構成の方が妥当である。なお、巻末には、宮入の著作リスト、年表、書簡、遺稿、アルバム、索引が含まれている。

ヨーロッパと日本に関して、住血吸虫症の歴史を比較する試みは参考になる。日本では地理的に限定されていたため、ほとんど農家を悩ませる疾病だったとってよい。所謂、「片山病」に関する論文は1847年に記録されている（住血吸虫症, 3.）。一方、ヨーロッパでは19世紀末から20世紀初頭にかけて、植民地で注目されてた疾病だった。住血吸虫症、あるいは *Bilharzia* は植民地病であり、寄生虫の生体及びライフサイクル、感染経路など、病因に関する知識が十分であったとは言

い難しい。しかし、植民地統治する側にとって、住血吸虫症は、多数の兵隊や官僚を襲う、熱帯病の中でも予防の対象に挙げられる疾病だった。エジプトは、世界の住血吸虫症の流行地方のなかでもトップの位置を占めており、1937年の調査によれば、人口の47%が感染していると予想された。すなわち、エジプトは住血吸虫症研究の中心地だった（*Bilharzia*, 10, 45, 54）。

1904（明治37）年5月26日、岡山医科大学の桂田富士郎教授が猫の解剖を行い、肝臓に寄生虫を発見した。同年の5月30日に京都帝国大学医学部の藤浪鑑教授（1870–1934）が、片山病で死亡した男性の解剖を行い、寄生虫を発見した。桂田はこの虫を1851年にエジプトで Theodor Bilharz（1825–1862）が発見した *Bilharzia haematobia* と比較し、*Schistosomum japonicum* の名を付けた（住血吸虫症, 6 ; *Bilharzia*, 14）。1913（大正2）年には、宮入が片山病の流行地方で貝に着目した。住血吸虫の卵を感染させ、その貝の中に住血吸虫の卵が *cerariae* を生み出し、この *cerariae* が動物及び人間を宿主として侵略する事、いわゆる中間宿主のライフサイクルを確認したのである（住血吸虫症, 17）。1915（大正4）年に、住血吸虫症研究者の Robert Leiper（1881–1969）が日本での業績を認め